

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2017/7/28	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	榊原香鈴美

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
日本、犬山、白帝セミナーハウス
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ブッダ・セミナー「ワークショップ:科学コミュニケーション」
<b>3. 派遣期</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 7 月 23 日 (1 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
大淵希郷 (野生動物研究センター 特定助教/日本モンキーセンター キュレーター)
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果:長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>本出張にて、7月23日に開催されたPWSブッダ・セミナーの大淵希郷氏による科学コミュニケーション研修に参加した。大淵氏は前職の科学未来館での学芸員経験を踏まえ、科学コミュニケーションとはなにか、またファシリテーションとはなにかという2テーマについて実践を交えながら話して下さった。参加者の実践の場として、日本モンキーセンターに来園しているお客さんの観察、またお客さんとの対話に挑戦した。お客さんの観察では、来園者がなにを見ているか、その展示からなにを感じているかを理解することを目標に構成が異なる何組かの来園者を分析した。その次のステップとなる対話の中では、自身の研究に係る科学の部分を伝えることにも挑戦した。お客さんとコミュニケーションをとり始める際に、どのタイミングで声をかけるか、また相手をどれだけ身構えさせずにするかなど、自身の体験と参加者全員のようすを共有できて非常に有意義であった。話しかけてもすぐに受け入れてもらえる人、初めから身分を明らかにすることで対話の協力を仰ぐ人、他愛ないやりとりから壁を作らずに始め話を展開していく人など様々なやり方があることを学んだ。個人的には、子どもと直接コミュニケーションをとることに挑戦したが、科学の内容までもっていくことの難しさを感じた。次回、お盆のキッズジャンボリーには多くの子どもが来場するのでその場で再度実践していきたいと思う。また、今回の実践から対話ログをつけることを今後も継続していきたい。文章にして見返すことで、どのような文脈で話を展開すると成功しやすいかなど反省がしやすい。またフィードバックは次への改善にもつながり、着実にスキルをアップさせる上で有用な方法だと感じた。関連して、どのような研修やスキルが科学を伝えるために役に立つかということも紹介していただけだったので、今後は自分なりに技術を鍛える方法を考え、取り組んでいきたい。</p>
<b>6. その他</b> (特記事項など)
来園者が多くお忙しい日にも関わらず開講を快諾して下さった日本モンキーセンターのみなさま、ならびに本セミナーの運営をサポートいただいたPWS滝澤玲子さん、PWS支援室のみなさまには心より感謝申し上げます。また講師の大淵希郷さんは楽しい雰囲気の中で、大変貴重なお話をしていただき誠にありがとうございました。